

令和6年度9月期 北海道大学

博士課程学位記授与式 総長挨拶

(日本語訳)

本日、博士の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。北海道大学を代表して、心よりお祝い申し上げます。

また、これまで皆さんを物心両面から支え、励ましてこられたご家族や関係者の皆様に対しましても、心よりお礼とお祝いを申し上げます。

本日、学位を授与された博士課程120名の皆さんは、それぞれの専門分野において、深い研鑽を積み、高い専門を修め、優れた研究成果を挙げられました。

また、本日、学位を授与された皆さんのうち、71名が留学生です。慣れない外国で、英語の授業と日本語による生活という困難を乗り越えて、学業を成し遂げられたことは高く評価されるべきものであり、深く、敬意を表します。

昨年7月、北海道大学は2030年に向けた新たなビジョン「HUVISION 2030」を発表しました。このビジョンでは、大学の機能を2つの座標軸で捉えています。縦軸は、伝統的な大学において最も重要視されている卓越した研究と教育です。これを私たちは、“Excellence”

の軸としました。一方、横軸には、こうした卓越した研究・教育すなわち Excellence を社会展開する活動として、Extension を設定しました。この座標系において、私たち北大が目指すべき方向が実に明確に視覚化されました。そして、このビジョンでは、北大が目指す社会を定義しました。大学は、「地球」「社会」「人間」の3つの分野における教育・研究を通じて、持続可能な well-being 社会を目指す組織であると定義しています。現在、私たちが直面している複雑な地域の課題、そして、気候変動などのような未曾有のグローバルな課題に対応するためには、「地球」「社会」「人間」という3つの領域すべてにおいて、総合的・学際的な研究を展開する必要があります。皆さんがこれまでに獲得してきた能力が、今後の研究・社会活動を通じて、この地球規模の課題の解決につながることを確信しています。

この新しいビジョンを公表してから、一年が経過しました。この一年間、世界は大きく動いています。日本でも政治が大きく動き、米国においても、新しい大統領が選ばれようとしています。私は、この一年間、毎週、ニューヨークタイムス Weekly を読んでいます。そこで感じるのは、日本のニュースが極めて少なく、世界の中で、日本の存在感が希薄になっていることです。一方、従来の民主主義に対して、権威主義が台頭し、さらに、大きな動きであった、脱炭素活動や

Diversity Equity Inclusion に対する強い抵抗の動きもあり、世界の向かう方向は、不透明さを増しています。

日本の存在感は、確かに、経済的順位で見れば、世界第 4 位となり、低下しつつあります。また、科学研究力も、今や、世界のトップ 10 から脱落しつつあります。しかし、民主主義と平和主義、そして、環境と人権を守る国として、世界から信頼され、世界から注目される国であり続けるべきです。

ポスト・コロナ時代のもうひとつの大きな要素は、人工知能と私たち人間の関係です。過去数十年間、私たちは多くのイノベーションを手にしてきました。遺伝子組換え技術、GPS 技術、高度な通信技術など、世界を変える技術を手に入れました。しかしながら、生成 AI の出現が私たちに与える影響は、従来のテクノロジーとは比べものになりません。

AI とどのように共存していくべきか、私たちはまだ明確な解答を持っていない。しかし、はっきりしているのは、AI の出現が、私たち人間の知性、理性、感性について深く考えるきっかけになったということです。私たちが持つ知性、理性、感性の本質と価値が根底から問われているのです。

AI と人間の関係が将来どうなるかは、私にも予測できません。し

かしながら、皆さんが将来この問題を避けて通れないことは明らかです。AI と健全な関係を築けるかどうかは、気候変動と同じくらい私たちの生存にとって重要な問題です。皆さんが解決策を見出すことを願っています。

本日の学位記授与式の最後に、本学の礎を築いた、北海道大学初代教頭である W.S.クラーク博士について、改めて触れておきたいと思っています。開学から 150 年近く経った今でも、クラーク博士は北海道大学の最高の教員だと思います。

クラーク先生は、今から約 150 年前に、アメリカ東海岸、ボストンに近い、マサチューセッツ農科大学の学長という高い地位にいました。彼は、それ以前にアマースト大学の教授であった頃、北軍に従軍し、南北戦争に参戦しています。そして、1876 年、彼は、明治政府の依頼を引き受け、大陸を横断し、命がけで太平洋を越え、東京で英語を学んだ学生 13 名と共に、荒涼たる札幌にやってきます。当時の人口は正確には分かりませんが僅か二千人程度であったと推定されます。クラーク先生のこの選択は、どう考えても、凡人の想像を超える挑戦であったと思います。

札幌農学校の礎を築くというミッションを成し遂げると、彼は、「Boys, be ambitious, like this old man!」という、実にシンプルで、

心に突き刺さるメッセージを残して、札幌を去ります。その後、帰国したクラーク先生は、事業を起こしますが、不運も重なり、不遇のうちに、59才で、生涯を終えたとされています。

これらの事実は、彼の人生が、生涯を通じて、チャレンジそのものであったことを意味します。クラーク先生の生涯は、学術や教育に留まらず、今の言葉で言えば、アントレプレナーシップ、スタートアップを通して、世界・社会を変えようとし続けた、果敢であり、彼自身の言葉通り ambition に満ちた人生でした。

皆さん、今日の学位授与式の終了後、是非、もう一度、中央ローンにある日本で最も良く知られている胸像であるクラーク像に立ち寄ってください。そして、彼の挑戦に満ちた ambitious な人生へ思いを巡らせてみてください。

最後に、私たちが生きるこの時代は、戦争があり、感染症があり、気候変動が私たちの地球そのものを脅かす多難な時代です。しかし、皆さんは、私たちの最高のロールモデルであるクラーク先生の「Be ambitious」の精神を胸に、学びを続け、挑戦を続け、勇気をもって、これから始まる新しい人生を堂々と歩んでください。

修了生の皆さんのご健康とご活躍を心から祈念して、私の結びの言葉といたします。